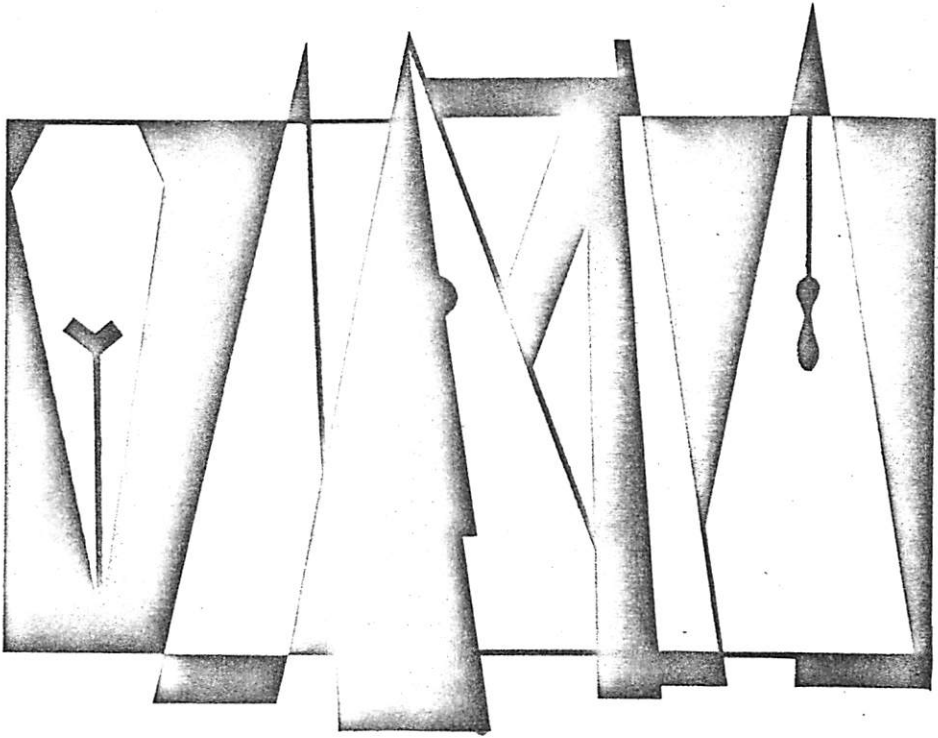


會 報



2

1965

香 川 県 病 院 薬 剂 師 会

新段階への御参加を望む

真 田 幸 良

既に御承知のことと思いますが、薬事日報1月7日号に発表されているとおり、「病院薬剤師会」は職種部会の第一号として、日薬に設置されることになりました。

香川県では以前から、精神的にその態勢を整えていたのでありますが、今春には名実共に県薬病診部として発足致すつもりです。

ただ、難点は、会費が大巾に増加するために会員諸氏の円滑な横切りが出来るかどうかということです。

会費（正確な決定は2月の日薬理事会において決定）の約1800円の中で中央及び県薬の二方向からの還元金が相当期待されるので、今までと違つた活発な動きがとれると思います。全会員の御加入を願います！

現在の日病薬は、従つて、交友団体として存続するかと思いますが、主体は、明確に日薬病診部の香川支部として発足することを再び申し上げておきます。

（香川県病院勤務薬剤師会長）

臨時總會御案内

- 日時 昭和40年2月27日(土曜日) 午後2時(時間厳守)
- 場所 高松市中新町 徳寿ビル内 田辺製薬高松出張所
- 講師 未決定(現在交渉中)
- 議案
1. 会計年度の変更
 2. 代議員の決定
 3. 40年度総会(5月)の講師決定
 4. 例会を年内に何回、いつ行うか
 5. 宿題報告
 - (イ) 給与、時間外 休暇問題(理事会)
 - (ロ) 薬局の定員と移動(理事会)
 - (ハ) 脱脂綿・ガーゼの局方試験(丸亀労災病院)

理事会だより

理事会は毎月1回、第3火曜日5時半より行います。

1月は中央病院にて臨時總會の件 宿題報告の件 薬局の定員と移動についてなど決議されました。

今回は2月16日(火曜日)鉄道病院にて行います。

提案などございましたら理事会まで御連絡下さい。

新会員の先生

三好光臣 四国鉄道病院勤務

新春随筆

カレンダーに思う

村松 租

年の暮になるとあわただしい裡に雖しもカレンダーの1つ位は早く求めたいものである。薬屋さんのカレンダーはどこの業種のカレンダーよりも華美であり、何れも趣向をこらしたものでありである。

家庭向によし、職場によしとここにも商魂と苦心が表われている。中には掛ける所によつて有難いのと有難くないのとある。職掌柄おかげでカレンダーには不自由しない。日頃親しい人にも分け、自宅にも持帰っているが近頃は老眼のせいか大きな字で書いたものがよい。国産の印刷技術が進歩して、静物・風景の写真は実によく出来ている。後世までしまつて置きたいと思ふものさえある。3、4年前に各メーカーのカレンダーコンクールが開かれて入賞したと鼻高々のプロパーもいた。

年末年始の挨拶まわりに4部、3部とかかえて持つて来られるプロパー諸君も大変気をつかうことであろう。貰つた先生はいいが、偶にいて貰わぬ先生は不気嫌になる。よく面倒を見られる医局には数多く集まつてくるが、そうでない科には一つも置かれぬ所もあるようだ。そこで私はカレンダーを一括、薬局に置くように薦めている。もちろん強制はしない。そして各科、各室、各所に配分してあげることになっている。プロパー諸君も助かり、薬局の株も上る。その中で偶々、よいのは役得も可。何といつても医局の先生だけで30人前後もいるのだから不公平になるのも当然である。もう1つ新薬協会で今年はこの型、この図案にしようと同じ物を作れば印刷費も安くなり医局で同じ物を3つも4つも戸棚にしまひ込む事もあるまいから又それぞれ適配してくれる。浪費と宣伝にも好都合ではないかなと私案を述べて見たがどう？

(四国鉄道病院薬剤長)

卒業後 35 年

秋 元 秀 夫

昨年は「オリンピックの年」であつたといわれる。しかし、私に印象づけられたものは、私の中学卒業後35周年の記念集會であつた。

私は昭和4年の中卒、明治と大正の境に生まれた男である。入学した時は150人、卒業した者は99人、4年から上級学校に入つた者を含めて、同級生は110人餘である。そのうち生存の知れているのが60名餘、他の28名は死亡、残りは消息不明である。明治・大正・昭和と3代を生きてきたものの宿命であらう。

学校の名は「大連第一中学校」、今は一部の人の記憶にしか残らない、旧日本領土の一部にある。いわば、われわれの集會は「育ち故郷」を失つた浮浪者の集いである。

だれが言い出したのか知らないが、35年目の會合が提案され、会場も「名古屋」と指定された。名古屋には3人しか同窓生がいない。それを在住者が引き受け、全国から北海道を除く會員がはせつけた。さる11月の連休日である。70を越した老師が3人も馳せつけてくれた會員も30名餘、過半数の出席率である。高い会費だつたのに……。

明かるい日ざしが部屋にみなぎつていた。35年ぶりの同窓生は、ほとんどがお互いの顔を忘れていた。お互いが受付で渡された名札を胸につけ、同じく渡された線の鉢巻を頭にまわすと若かりし頃の童顔がよみがえつた。年月とは、若さから頭髮の変化を求めただけの労力であつた。

話した。飲んだ。笑つた。35年目だ。旅館もその全精力をつくしてサービスしてくれた。「珍しい會だ。」という。「一生に一度も会えない會」と女中の1人が言う。座は乱れても酒に乱れる者はいない。先生は別室に、われわれは求めて大部屋に寝る。大部屋といつても蒲団はそれぞれ羽根蒲団にフォームというデラックスである。「50を越した者の修学旅行」と1人が批評した。大学教授から会社社長、大会社重役、学校長など混つているが、それが皆中学生

にもどつている。

朝、旅館の庭にモミチが映えていた。

朝風呂の中、朝食の前、話はずきない。多忙な連中は、夜から朝の間に出て行つた。残つた連中は、3人の先生を中心に京都まで、名神国道をドライブすることになる。中食は京都南禅寺前の「湯どうふ」ときまる。

東に帰る者と、朝食に一献の別れをおしみ、紅葉の名神国道を西にドライブする。天気もよかつた。琵琶湖もこの日はあおかつた。南禅寺もまた、紅葉のさかり、行楽客の行き交う山門の前で中食を終えたわれわれは円陣をつくつて、今は亡き中学校の校歌を唱つた。涙がにじんできた。行楽客は速巻きをして、われわれが持つ「昭和4年 大連一中卒」という字を静かにながめてくれた。

解散後、京都駅で小学以来の友達と二人だけで別れの杯を上げる。その友がいう。「息子がね、今度結婚したよ。君が昔抱いてくれた奴だ。親爺の知らない間に恋愛してね。…親爺なんて知らない間にツンボ棧敷に上げられているよ」 「お互いに50の坂を越しているからな僕も君の二の舞をするかもわからん」と、私。この友は終戦後の混乱時が過ぎ、お互いの消息がわかつた時、「心の中で毎日お前の冥福を祈つておつた」と書いてよこした友である。「あえてよかつたな。35年ぶりに。みんな元気で。」 「今度はヒロシマだな。」

二人は笑う。昨日、次回の会は40年目と約束した。今度はどんな姿で会うのだろう。

発車15分前まで二人だけで飲む。その友はそれから十数年目の墓参をするのだという。数日後友から便りがあつた。その文には書いてあつた。「久方ぶりの京都の菩提寺。昔、20人餘もいた僧侶は今3人しかいない。本堂も冷たく、墓地にワクラ葉が舞つていた。諸行無常と片づけるには寂しく、一步寺院を出るとつい先刻までの旧友との交りになつかしく、われわれがここまで生きて来たという歎びのみがわきおこつて来た。」

考えれば、生きて来たという歎びだけでなく、今後も生き抜いて行かなければ— という決心をさせてくれたのも、35年の会の大きな副産物であつた。(香川県病院勤務薬剤師会副会長)

私 の 発 言

病 診 薬 会 に 思 う

ロ ン リ マ ン

新発足以来三ヶ月経た今日感じられますことは、年代の開きにおける考え方の相違ではないかと存じます。

大部分の病院薬局指導の立場にある先生方はあまりにも大時代的な考え方をされ、若い進歩的な先生方はあまりにも理想へと急ぎすぎる傾向にあるのではないかと感じられます。同一の職業で同一の広場にある私達病診会がこのような状態では、将来の団結、及び発展は遅々として進まぬのではないかと思ひ、ここに若輩者が一筆をとつた次第です。

現在社会はめまぐるしく変化しています。例を企業にとりますれば倒産相次ぎ、経済事情は悪化しています。この中で上・下役の区別なく経営に対する良きアイデアは取上げられ、経営の一方針の中に入れられ且つ経営者の包容力と適確なる判断力を持つた企業は相変らず発展しています。かかる時代故に病院薬局指導者の先生はエリート意識をすてて部下の中に溶けこみ、部下が何を望み、何を欲しているかを、充分なる話しのもとに見出だすと共に寛容と忍耐をもつて受け入れると同時に指導されることをお願い致します。

若い先生方は長い目で会及び各薬局発展のため一步一步前進への努力をすることこそ栄光の日は来ると信じます。そして、私は今、「ローマは一日にして成らず」を再確認するものであります。

所 感

K S 生

新春を迎え、一月もはや過ぎ去ろうとしている。

病院勤務3年、目まぐるしい薬学の進歩、新製品の続出に遅れまいと思うに、毎日の勤務に精一杯の現状、もう少し余裕のある勤めが出来ればと痛感します。

時折訪れるプロパーの方々から新製品の説明でも聞かせて戴ければと、せめてもの望みですが、これも仲々人員の関係上、我々薬剤員にはかなえられません。文献等を読めば理解出来そうですが、やはり耳から聞くということ、これ、大なる効果を持つものと思います。

プロパーといえは気付くことですが、1、2年前の方達とは大分親しみが欠けたように感じます。薬局に現われ、薬局長以外の我々には、あんたらに用はないといった調子で知らぬ顔の人達が大半です。

成程、何の権限も与えられていない一薬剤員である我々には用はないかも知れませんが、外部から訪れる人としての礼儀は守つてほしいと思います。

そして同じ仲間どうし、相互に気持よく、彼等が宣伝していつた薬を使用する立場にある我々にも親しく接してもらいたいと思う。そう考えるのは私だけでしょうか？

勤務年数を経るばかりで自分自身、何の進歩も見られないのは大変恥かしく思うのですが、とかく周囲の矛盾ばかりが目につけて来ます。人の生活に矛盾は付きものとは納得していてもせめて薬剤師という枠の中では、少しでもなくしたいと考えます。

調剤・製剤・薬局事務・雑用等に多忙過ぎる現状を開拓して、薬剤師とは名ばかりではなく中身のつまつた者に仕上げ、生きて勉強が出来る勤務状態に変えるよう自らの手で、日夜努力していきたいと思います。

忘年会に思う

夕崎真弓

県病薬初めての忘年会とのこと、一体どのような会になるのだろうかと思ひながら、会場へと急いだ。

ありきたりの、食へ、飲む会に終るのではないかという予想に反して、薬務課の先生方、県薬会長と同席という、今までには考えもしなかつた顔合わせであつた。

同じ鍋をつつきながら、話にくいことも割合スムーズに話し合えた。その上理事長、武内薬務課長の御挨拶も我々にはなかなか伺う機会のないものだけに、非常に今後の勤務生活への励みになつたように思う。何故こういう素晴らしい会合が今までに開けなかつたのかと不思議に思へた。

病勤は病勤、開局は開局、保健所関係は保健所関係と個々別々の立場でどんなに討議していても大きな成果を期待できないのではないかと。やはり、お互いに団結して、小さな力の結集こそが、やがて驚くべき力となつて、薬剤師全体の地位の向上に役立つのではないかと思います。今まで香川県の薬剤師の地位が高知県のそれよりも低いのも、結局はそこに原因するのではないでしようか。

ニチポーの大松監督ではないけれど、「なせばなる」やろうと思えばどんなことでもどのようにしてでもやれると思います。他の人が、いや他の県に出来ていることが香川県でやれないはずはない。やはり、薬務課、県薬、県病薬と三者一体となつて、たとえ個人病院に又管理薬剤師として薬局に採用する場合にも、県薬、県病薬を通さなければ絶対就職できないようなシステムにして運動していけば薬剤師の地位ひいては労働条件もおのずと向上していくものと確信致します。そういう意味で忘年会は非常に有意義であつたと思います。折角の顔合せの会を今後無意味にしないようにお互いに努力していこうではありませんか。ただあの会合で薬務課の方々及び県病薬の先生方の自己紹介があれば経験の浅い私などは一層よかつたと思います。

今後の県病薬の歩む道も忘年会を機会にして一段と視野の広い井の中の蛙で終らずに新段階へと飛躍していくのではないかと期待しています。

編 集 後 記

新春を迎え、何かと御多忙の事と思います。

今回は沢山の御投稿を頂き、広報係と致しましても非常に喜ばしい限りでございます。

香薬会報にも、同じ原稿で掲載させて頂きましたのもありますが、現在の所、香薬会報は県病薬のPRを中心に考えており、県病薬の会員の全部の先生方にお渡し出来ない状態ですので御了承頂きたいと思っております。

県病薬も、会長が最初にのべておられます通り、四月からは県薬病診部として発足するという段階に立っております。会員の先生方におかれましても色々な御意見もございませうと思っておりますので、是非この機会に御投稿賜りますようお願い申し上げます。

又、Ⅱ号の御意見に対する御批判、御感想なども、ペンネームで結構ですからお寄せ頂ければ何よりと思っております。

香薬会報は毎月一回、県病薬会誌は三月に一回発行の予定です。(T・M)

原 稿 送 り 先

高松市七番丁 高松赤十字病院内

香川県病院勤務薬剤師会広報係迄

昭和40年1月25日発行

発行所	香川県病院薬剤師会
事務所	高松市七番丁 高松赤十字病院内③7101
発行人	真 田 幸 良
編集人	恵 美 善 晴

